

## スタウトの抽象的個別者：現代唯名論の起源

齋藤暢人(早稲田大学)

現代の形而上学・分析的存在論においては、性質の本性をめぐる論争が活発に行われている。この現代の普遍論争の焦点のひとつが、「個別的な性質」という特異な存在者、トロープの取り扱いである。これを基本的な存在者として認める者が、分析的存在論における唯名論者ということになる。

今日、トロープ理論の代表者としてはD.C.ウィリアムズやK.キャンベルの名が挙がる。しかし、彼らにさらに先駆けて現代版唯名論が登場するきっかけを作ったのがG.F.スタウトである。今回は彼の「普遍者と命題の本性」「性格は普遍者か、それとも個別的か」という、今日古典と目されるようになった二論文に基づいて、トロープ理論の源流を探り、その根本的な問題の所在と内実を明らかにしてゆきたい。

具体的には、一般名としての述語の存在論的基底をどのように考えるのか、ということが基本的なテーマであり、それに付随して、出来事などを基本的な存在者として認めるかどうか、また、属性の形而上学の難問である、ブラッドリー的な一元論や無限後退の危機にどう対処するのか、といったことが問題となる。

こうした彼自身の主題を検討したうえで、その後のトロープ理論の展開を追跡してゆくと、そこで根本的な問題として問われていたのは、「述定」をどのようにとらえるか、という問題であったように思われる。さらに、それが名辞の指示の問題とも相関するとするならば、そこでは間違いなく分析的存在論の基本問題が論じられていたことになるであろう。かくして、現代のトロープ理論が未だにスタウトの説を回顧し続ける理由もまた明らかになってくるのである。

スタウトはラッセルやムーアにちょうど一世代先行する哲学者であるが、ブレンターノの記述心理学の英国への紹介に努めるなど、独逸学派や現象学派とも接点をもつ、という思想上ユニークな位置に立つ人物でもある。こうした背景にも注意しながら、現代の唯名論の出発点を振り返り、今後を展望してみたい。